第 5 章　ばんえい競馬

野村　和樹

5.1　歴史

「ばんえい競馬」は明治時代、北海道の農民の厳しい暮らしの中から生まれ、当初は、北海道開拓に活躍した農耕馬の価値や力を試すための競争として始まり、2 頭の馬を互いに引っ張らせ、競いあわせていた。ソリに過重をかけて引かせる方法は明治の終わりごろから始まり、草ばん馬と呼ばれて農耕馬の祭典として定着していった。

図 1　馬による農耕の様子

出典：1994 年農耕馬・代かき体験学習 HP

「ばんえい競馬」が公営になったのは、昭和 21 年 11 月に公布された地方競馬法施行規則第 9 条の施行によるもので、昭和 21 年には都道府県が主催、昭和 28 年から市が運営する事となっていった。当時は戦後の混乱期で食料事情が極めて悪く、その改善のために馬の畜産が提唱され、また軍用馬として徴用されて激減していた馬の生産を促すといった目的もあり、食料増産と馬産振興という二つの経済復興政策によって公営化されたのである。実際に法に基づいたばんえい競馬を実施したのは北海道と青森県だけであった。このレースは人気がなく、また地方競馬が都道府県主催に移管された昭和 23 年には、早くも休催になってしまう。当初ばんえい競馬独自の面白さが理解されにくかったことが理由としてあげられる。その一方で馬産の育成は順調に振興していった。関係者の尽力により、徹底的な経費節減とローカル性が受け入れられ始めたことから昭和 24 年に再び開催された「ばんえい競馬」は初めて黒字を記録、昭和 28 年に、旭川、帯広、北見、岩見沢市営競馬場が発足し、昭和 41 年には平地競馬は道が、ばんえい競馬は市が行うという二分経営方式が確立していった。

その後、平成 19 年からは、「馬の一発逆転ライブショー・ばんえい十勝」をキャッチフレーズとして、全日程を帯広競馬場で開催している。あわせて、夏季としては初めての本格的なナイター競走「ばんえい十勝ナイトレース」も開始、ナイトレース期間中は各競走の発走時刻を 3 時間程度繰り下げ、日没前後からは走路沿いに新設したイルミネーションも点灯させてナイター気分を盛り上げている。なお、クリスマスから年末にかけての一部

開催日は「プチナイター」として、最終競走の発走時刻を 1 時間程度繰り下げて開催している。帯広競馬場では平成 6 年度から、馬場にヒーティング設備が施され、冬季でも馬場が凍結することなく競走が行えるようになった。これにより、従来は 11 月で終了していた開催期間を徐々に延長してきたが、2005 年度からは長期の休催期間を設けない事実上の通年開催を、北海道の公営競技では唯一実施している。

表 1 ばんえい競馬の沿革

昭和 21 年	地方競馬施行規則第 9 条により公営となる
昭和 28 年	旭川、帯広、北見、岩見沢市営競馬発足
昭和 46 年	鉄製ゾリ、引木、グラスファイバー製かじ棒の採用 スターティングゲートの設置
昭和 48 年	体重制格付区分収得賞金制に改正
昭和 51 年	鉄ゾリ、重量物を全鉄製に改造
昭和 53 年	出走馬年齢を 10 歳以下に制限
昭和 59 年	四市競馬場において相互場外発売開始並びに中央競馬釧路サービスセンターでの場外発売実施
昭和 61 年	8 月 24 日岩見沢競馬場において、キンタロー号がばんえい史上初の賞金収得額 1 億円を達成
平成 5 年	ばんえい界初の女性厩務員誕生
平成 6 年	帯広競馬場走路ヒーティング施行 ばんえい競馬マスコットキャラクター「リッキー」制作
平成 8 年	ばん馬と象の対決(9 月 8 日帯広競馬場) 金山騎手が久田騎手の持つ年間 161 勝のレコードを更新し年間 163 勝の記録を樹立
平成 9 年	ばんえい界初の女性騎手誕生(辻本由美騎手 1 月 11 日帯広競馬場デビュー)
平成 13 年	フランスで行われた世界ぺるしゅ論大会に招かれ、模擬レース実施
平成 16 年	北海道遺産に選定
平成 17 年	スーパーペガサス号「ばんえい記念」史上初の 3 連覇
平成 18 年	ばんえい界初の女性調教師誕生(谷あゆみ調教師)
平成 19 年	帯広市による単独開催となる(旭川市、岩見沢市、北見市撤退) オッズパーク・ばんえい・マネジメント(株)設立

ばんえい十勝 HP より作成

5.2　特徴

5.2.1　ばんえい競争馬

一般の平地競走で使われているサラブレッド系種などの「軽種馬」は使わず、古くから主に農耕馬として利用されてきた体重約 800-1200kg 前後のばん馬「重種馬」が使用される。

北海道には日本在来種である北海道和種馬の「ドサンコ」と呼ばれる馬がいた。ドサンコは、体高（首の付け根の背側から地面までの高さ）が 125~135cm の小型の馬で、明治以降、北海道の開拓に使われたが、多くは背中に荷物を載せる駄載馬であった。広い大地を開墾したり、山から木を切り出したり、重い材木や石炭を積んだ荷馬車を引いたりするには、より力の強い大型の馬が望まれることとなり、そこで、ヨーロッパの大型の品種が輸入され、より大型のばん馬がつくられるようになっていった。当初は軍馬として取引され、馬産の中心でもあったアングロノルマンや、産業馬としての需要が強かったペルシュロンが多く用いられ、戦後の馬産振興期にフランスからブルトンが輸入され、ペルシュロンとブルトンの混血が進んでいった。高度経済成長によるモータリゼーション、農業の機械化などによって産業馬としての需要がなくなり、生産頭数は激減した。1974 年にアメリカからベルジャンが輸入され、従来種よりも力を発揮し、さらに混血が進み、現在は純血種はほとんど見られなくなっている。

人間が騎乗する乗用馬は速く走ることや敏しょうな動きが要求されるが、ばん馬はけん引力が強く、従順で、長時間のゆっくりした作業に耐えられる馬である。農用馬として活躍したばん馬の体格的特徴は、肢が太く、胴体が丸く大きく、さらに物を引くのに有利なように背丈に対して胴が長いことである。また、サラブレッドなどの軽種に比べ、重種とも呼ばれるばん馬は皮膚が厚く、太りやすいのが特徴で、体重は 1、体高は 180cm にもなる。サラブレッドの体重が 500kg、体高が 160cm ほどであることを考えると、ばん馬がいかにダイナミックな存在であるかがわかる。

ばんえい競走馬になるには、能力検査と呼ばれる試験に合格しなければならない。この検査は約 1200 頭の登録馬から 220~230 頭が合格できる狭き門で、不合格馬は故郷に帰り、農耕馬として転用されたり、各地で観光馬を車曳いたりすることもあるが、その多くはグルメファンの欲求を満たす食材として全国に配送されてしまう。

図 2　馬刺し

出典:馬肉郷土料理けんぞう HP

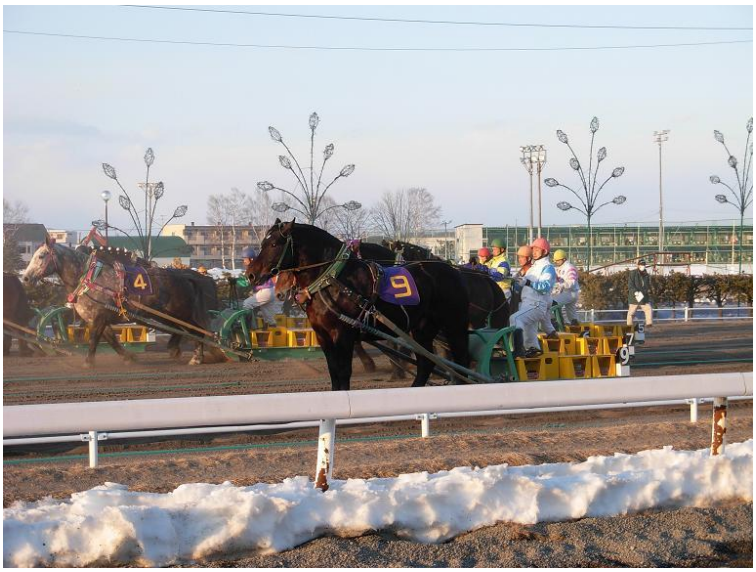
5.2.2　重量

「ばんえい競馬」には負担重量があり、「騎手重量」とそりに載せる荷物の重量「ばんえい重量」に分けられている。騎手重量は 75 キロに統一されているので、軽量の騎手は不足分の重量を通称「弁当箱」と呼ばれる重量カバンに入れて調整し、競走中はこのカバンをそりに乗せ、レースごとの計量に持ち運ばなければならない。ばんえい重量はクラス別になっており、それぞれ規定がもうけられている。開幕直後は概ねばんえい重量が軽めに設定され、シーズン後半になるにつれて徐々に重くなっていく。これはいきなり重量を重く設定すると、完走できなかった馬が自信を無くしてしまうためである。最低 500kg（牝馬は 480kg）、最高はなんと 1 トンにもなり、さらに馬具の重さを合わせると 70 キロ以上の重量増加となる。

5.2.3　勝敗

ばんえい競馬は、途中に 2 つの障害を設けた直線 200m のセパレートコースを使用し、フルゲート 10 頭で争われる、世界で唯一の「ひき馬」競技である。第 1 障害はスタートダッシュから一気に通過するが、第 2 障害は手前で一旦停止し、騎手は馬の呼吸と他馬の動きを見ながら、仕掛けのタイミングを図る。セパレートコースで争われるため、他馬への進路妨害などで審議となるケースもある。ゴールインはそりの最後端が決勝線を通過した時点で認められ、これはばんえい競馬が元来「荷物を運びきる荷役作業」に由来していることと、決勝線上で馬が止まってしまうことがあり、鼻先では決勝判定が難しい場合があるためである。よく知られている平地競馬とは違い、スピードだけでなく、馬の重いものを引っぱる力と持久力そして騎手のテクニックが勝負を分ける。また、当日の馬場水分のパーセンテージが電光掲示板に表示され、 雨がふるとソリの滑りが良く、タイムが早くなり、天気の良い日は水分が少なく、タイムは遅くなる。これは平地競馬と全く逆である。運びきったそりはレース後、コース脇のトロッコに載せられてスタート位置まで戻される。成績は 1 着から最下位まですべて走破タイムのみで発表され、平地競走のような着差は表示されない。タイムオーバーも設けられており、重賞・特別競走 では、ス

図 3　レースの様子



出典：ばんえい十勝劇場 HP

タートから 10 分（3 位入線馬が 7 分以内に入線した場合は 3 位入線から 3 分）を超えて入線した場合 、一般競走 ではスタートから 8 分（3 位入線馬が 6 分以内に入線した場合は 3 位入線から 2 分）を超えて入線した場合に、当該レースは失格となる。

5.2.4　判定の困難

当初、「ばんえい競馬があるところには争いがある」といわれるほどトラブルが頻繁に発生しており、これはレース審判の難しさもあってなかなか解決せず、大きな問題となっていたが､昭和 44 年に VTR パトロールが採用されてから飛躍的に効果が上がるようになり、現在は VTR も 8 機に増設され、かつてのような八百長騒ぎは姿を消している。とにかく最後端で勝敗が決まるという競技規定はハナで勝敗が決まる競技より審判が難しく、それを見事に克服してきた「ばんえい競馬」は今や国内外の競馬関係者の見学対象ともなっている。

5.2.5　マスコットキャラクター「リッキー」

平成 6 年 4 月 21 日、北海道市営競馬組合設立 5 周年を記念して、ばんえい競馬マスコットキャラクターとして登場した。同年 8 月 15 日、公募による 1048 通の応募の中から厳正な審査により愛称「リッキー」が誕生した。身長 2m、体重?kg の巨体で、毎週日曜日には競馬場内におけるイベントやファンサービスに活躍している。なお、現在は 2 代目リッキーであり、先代に比べて「かわいらしさ、愛らしさともに 120%アップ！」したようである。

また、2006 年まで現役馬として活躍した、同名の「リッキー号」がおり、2007 年より馬文化を PR する帯広市の特別嘱託職員に任命され、帯広市の住民票も発行された。帯広競馬場で観光客を乗せたり、地域の保育所などに出向いて児童を乗せたりと、みんなに愛されている。

図 4　2 代目リッキー

出典：ばんえい十勝 HP

参照 HP

ばんえい十勝 HP

http://www.banei-keiba.or.jp/datafile/index.html

1994 年農耕馬・代かき体験学習 HP

http://www.uchinome.jp/archives/yamada/yamada17.html

ばんえい十勝劇場 HP

http://www.tokachi.co.jp/banei/

馬肉郷土料理けんぞう HP

http://www.basashi-kenzo.com/oshinagaki/index.html

とかち馬文化を支える会 HP

http://umabunka.com/

ばんえい競馬情報局

http://blog.oddspark.com/baneiinfo/

十勝支庁 HP

http://www.tokachi.pref.hokkaido.lg.jp/index.htm

北海道新聞帯広支社

http://tokachi.hokkaido-np.co.jp/banei/index.html

日本馬事協会 HP

http://www.bajikyo.or.jp/